

『琥珀のまたたき』刊行記念対談

2015.8.10

〈無言〉を描く文学

小川洋子 × 小野正嗣



■閉じられた世界の無限性

小野 『琥珀のまたたき』をたいへん面白く拝読しました。小川さんは、空虚とか空洞とか、そこに存在しないもの言葉によって立ち上がらせるということをずっとおやりになっています。

僕がかつて教えていた学生に熱烈な小川洋子ファンがいるのですが、彼女が言うには、小川さんの作品の特徴は、必ず何かが欠けている世界が描かれていることだと。例えば、体の一部分が欠けていたり、家族の中の誰かが欠けていたり、それこそ意味を伝達するための言葉が欠けていたり、欠損とか欠如ということが非常に重要なモチーフだと言っていますね。

僕も読んでいて気がついたのですが、小川さんは、「かけら」という言葉を書く際に、必ず欠如の「欠」という字を使っています。僕は平仮名で「かけら」と書いてしまうのですが、小川さんは「欠けら」と書いたり、「欠片」と書いて「かけら」というルビを振ったりする。欠如や欠片があるんですね。とても面白いのが、欠けたものだけ見ると、それは小さな断片ですが、かけらが生じるときには、同時に、それが後に残すものとして空虚や空洞が生まれることです。

もうひとつ、小川作品においては密室的な閉じられた空間

が非常に重要な要素になっています。そして、その密室は必ず壊れます。閉じられている世界は一見すると、非常に無時間的で、静止した世界で秩序がありますが、閉じられているかぎり、必ず外部から何かがやってくる。欠片というのは、それこそ何かが外れたり取れたりすることなので、実は調和の破綻は予感されている。完璧だったものが欠けることによって外部から侵入を受けて、その様態が完全に変わってしまう。

『琥珀のまたたき』という作品にも、まさにその二つの主題がはっきり書き込まれています。温泉地にある高い壁に囲まれた別荘の中に閉じこもって生活する家族の物語です。その家族にはお父さんが欠けていて、しかも本当は四人きょうだいだっただけですが、一番下の子が欠けてしまっている。意識してお書きになっているのでしょうか。

小川 自然とそうなっちゃうんです(笑)。

小野 ほかの作品を読んでも僕が不思議に思うのは、小川さんの作品の人物は大声でしゃべらないことです。ささやきますよね。怒鳴ったり叫んだりしない。今作でも、残った三きょうだいは、外に出てはいけない、大きい声を出してはいけないと母親から言われているため、声にならないような小さな声でしかしゃべりません。しかもこの三きょうだいは、ある意味で三人で一人の人間を形づくっています。長女のオパールは物語を語る口、次男の瑪瑙は耳がよいので歌が

とてもうまい。長男の琥珀は目の中に亡くなった妹を見ます。話す、聞く、見るという人間が持つコミュニケーションの機能を三人が体現していて、その人物たちが閉じられた空間に身をひそめている。

そうすると、もう胸が苦しくなってくるんです。この閉じられた空間にいつ亀裂が生じるんだろう、とドキドキしながら読み進めました。

小川 でも、はじめから、そういうテーマで書こうと思っていたわけではないんです。いつも出発点は、これは面白い題材だぞ、と見つけるところから始まります。今回の長い旅の最初は、アール・ブリュットでした。

自己実現のためではなく、純粋な要求に突き動かされて何かをつくってしまう人を描きたかったんです。そこに自分の痕跡を残す必要はないし、名声も求めない。『琥珀のまたたき』では、本来の芸術家が嫉妬するような芸術家を書こうとしてスタートしたのですが、むしろ家族の話になった。その点は自分でも珍しいなと思いました。

小野 なぜいつも閉域なんでしょうか。そのことと関係があるのかわかりませんが、小川さんの小説を読んでいると、これはどこの国の話なのかと不思議な異国性を感じます。現代の日本という感じが全然しないんです。僕はいつもヨーロッパの町を思い浮かべます。特に今回は子どもたちの名前が、琥珀、オパール、瑪瑙と、化石や鉱物の名前になっていま

す。

小川 名前をつけるには慎重さが必要です。さきほど、言葉が意味から解放された時の広がりについて話題に上りましたが、名前の持つ意味、情報を一旦剥ぎ取ると、より深くその人物の中に分け入ってゆける気がします。

小野 固有名の選択には結構気を使っていらっしゃるわけですね。

小川 はい。小野さんは、いつも「浦」という場所を持っておられる。それはたぶん小野さんが生まれ育った町が出発点になっているのかもしれませんが、ある時点で小野さんだけの土地になっていると思うんですね。さきほど、閉じられた空間について言及して下さいました。私が小説を書く時のイメージは、ドールハウスをつくる感じですよ。

小野 「コーネルの箱」みたいですよ。

小川 まさにそうです。鉱物やロバや図鑑やオルガンや、まじりいろいろなものを集めてくる。それらに生き生きと声を発してもらうためには、やっぱり場所の輪郭を作らなければならぬ。それらに相応しい居場所を与える必要がある。それが曖昧だと、書きづらいです。きちんとした輪郭に守られている安心感、世界からそこだけが切り取られ、誰も邪魔ができないんだという親密感。そうしたものから物語が発生する。いずれその安心も親密さも変質し、崩壊するわけですが、その過程こそが物語になるんです。

小野 その場所が、具体的な固有名、都市名とか地名を持った場所という感じがしない。現実には存在する場所と結びつかないから、読んでいる人が、これは自分の町とか自分の場所だと、あるいは逆に、誰のものでもあるどこにもない場所だ、というふうに想像することができず。

小川 物語の世界に入りながら、読者に自分だけのドールハウスを作ってもらえれば、それは理想です。物語を確固たる堀で囲うことは、一見、制限を加えるように見えるかもしれませんが、将棋盤が九×九で無限の宇宙だと言われるように、輪郭があるからこそ、無限な感覚を味わえるということが起こるんだと思います。

小野 閉じられた世界だから、登場人物もそんなにたくさんはいません。だからこそ一人一人がとても丁寧に、しゃべり方や動きなど、全てがいとおしむように書き込まれている。今、アール・ブリュットのお話が出ましたが、その作り手たちはマージナルな状況に置かれた人たちが多いので、いわゆるふつうの芸術家に比べて、非常に不自由な枠組みのなかで創作活動を行なっていますよね。小川さんもまたある意味でご自身を厳しい制約のなかに置くところから書き始め、限定されたある枠の中で世界をすごく丁寧につくっている。小川さんの世界を満たすささやかな存在に対する優しく静かな接し方は、そういうところから来ているのだろうなあと思いました。

小川 輪郭がもう決まっているので、書き手が勝手に外に行くとわけにいきません。登場人物たちと同じ空間にじーっと一緒にいるんですね。彼らが何をしているのか、何をしゃべっているのか、何を着ているのか、黙って見ている。書いているというよりも、見ている、観察している時間のほうが長いんです。

小野 そこにないものを言葉で出現させることが小説を書くことだとしたら、小川さんは、その作品の中にある空洞、不在そのものを記述しているというか、観察されている。

小川 そこにないものを書く、欠けているものを書く、昔はあったけど今はもうないものを書く。ひたすら観察していると、そういうものが見えてくるんです。

小野 小野さんの小説もそうですよね。海と山と空と岬によって閉じられた町で、同じメンバーが顔を合わせているんだけれど、そこに死者も平等に登場してくる。あるいは、猿や鹿が加わってくる。ですから決して人数が足りていない感じがしないんです。

小野 僕が勝手に小川さんに親近感を覚えるのは、小川さんの世界には動物がいっぱい出てくることです。今回もロバや猫がでてきます。それに亡くなった妹の存在がずっと感じられるので、死者も常にそこにいる。作品のなかに流れる時間には、死者が過ごした時間も確かに含まれていると感じました。

小川 小説という道具の画期的なところはそこですよね。そこにいない人もいるかのように扱っていいんです。私も小野さんの小説を読んでいて、互いの作品の登場人物たちが、合図を送り合っている気がしました。

小野 それは本当に光栄です。僕はフランス文学とその他の地域でフランス語で書かれた文学を研究してきたこともあって、小川さんの作品の持つている、ある種の異国性というか、これは一体世界のどの場所の話なんだろうと感じさせる雰囲気、いつも惹かれてきたんです。

小川 たぶん私が小説を書こうとするときの世界の見方や視線が、遠くを見通す、上のほうに立って俯瞰して見る、というところがないんですね。

小野 傍らにあるということですか。

小川 『琥珀のまたたき』でも、作者の立場としては、多分庭の木の幹に隠れてじっと見ているという感じで、上から全体を見回していない。しかも、見えている範囲のことしか書かない。だから、時代とか社会とか、自分がつくった枠の外側にあるものについては全く頓着してないんです。

小野 僕も『森のはずれで』という作品で、ヨーロッパ的な場所を舞台にして書いたんですが、日本語でそういうものを書くことがいかに難しいか痛感しました。

小川 小野さんの作品は、私が書いている作品とまるで対極にあるかのように、日本の土着的な場所を描きながら、しか

し、決して特定の町ではないと思うんです。背景を知っている人が読めば、大分の南のほうの町だろうなと思うかもしれないけれども、それは現実的な情報からわかるだけで、例えば、外国の人がこれを読めば、日本的、異国的といった枠組みを越えて、「浦」という舞台を自分なりにまた構築できる。

小野 つまり、作品というのは、別に同時代の読者にだけ向けて書かれているものではない。小川さんの作品はたしかに同時代の読者に向けて日本語で書かれているけれど、同時にはるか未来の読者に向けて、百年とか二百年先の人に向けて書かれている感じがします。まだ生まれていない人たちに向かってても書かれている。すぐれた文学作品とはみなそういうものなのでしょうが、小川さんの作品に関しては特にそうだと感じるのです。それはいろんな地域に生きる、さらに遠い先の未来の人たちが読んだときにも、違う言語で読んでも、みんなが自分の場所として読める作品です。だから作品に含まれる時間の厚みがすごい。今回の作品では、三きょうだいの名前が化石や鉱物からとられていますが、化石や鉱物の中にはそれらが形成されるまでの時間が地層となって重なっている。主人公でもあるアンバー氏（琥珀）は芸術家でもありますが、彼の芸術は、いわば地層を掘るようになって、それぞれの層に含み込まれた時間と記憶を再現することで成り立っているのかなと思いました。